

令和7年度リンダウ・ノーベル賞受賞者会議 参加報告書 兼 アンケート

参 加 会 議： 第8回会議(経済学関連分野)

所属機関・部局・職名： 京都大学・大学院経済学研究科・博士課程

氏 名： 吉川 英輝

1. ノーベル賞受賞者の講演を聴いて、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。〔全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。〕

本会議では経済学の関心の潮流として、①不確実性と環境問題、②AIと情報の権力性であると理解することができた。①不確実性と環境問題については、ジョセフ・スティグリッツ、ラース・ピーター・ハンセン、スティーブン・チュー、ブライアン・シュミットのパネル・ディスカッションにて議論された。気候変動問題は、長期的な気候変動予測と介入効果の測定が困難であること、グリーン・テクノロジーが開発途上であり、技術覇権競争が行われていることが不確実性に関する課題として取り上げられた。特に印象的であったのは、炭素税の問題点について、社会的便益・費用を計上できるという疑わしい観念が広く受け入れられているという指摘と、中国のグリーン・テクノロジーに対して、欧米は、対抗するべく貿易保護政策を利用するのではなくて、積極的に取り入れていくべきだとスティグリッツの主張であった。また、不確実性が高いものの社会的便益の高い基礎研究や未成熟技術には、民間資本が手を出しにくく、政府が補助すべきであるという主張が産業政策の議論と重なりながら進められていた。一方で、それらの全てに私は同意はできず、反論すべき点が見つかったことが、自分の経済観と知識に対して自信を持つことにもつながった。近年ではイノベーションの担い手、支え手として産業政策を重視する主張が経済学の中で影響力を(再)拡大している。そうした主張には不確実性を根拠とした一定の説得力はあるものの、依然として政府が市場に比べて効率的に資源配分を行えるという重要な点について十分に論じているとは言い難い。大きく抗いがたい潮流の中で建設的な議論を促進するために、自らも気候変動問題における産業政策論争に参加することを検討するに至った。②AIと情報の権力性については、ポール・ローマーが講義で新自由主義的な転回が巨大テック企業を中心として極度の富と権力の集中を生んだと主張し、オープン・ソース・ソフトウェアによる情報の共有システムを代替的に構築することが重要であると主張した。また、暗号理論研究で著名なヤエル・タウマン・カライが特別講演を行い、暗号化の基礎を教授した。このように、政治的・社会的に議論を呼ぶ巨大テック企業の独占問題は、経済学でもこのように関心を高めていると知ることができた。旧来のミクロ産業理論的な独占問題の理解を超えて、現代的に特異な産業構造と解決方法の模索が進んでいることに、経済学の社会貢献への姿勢を感じるとともに、経済学的な視座がいかに活かされるのかの議論は未熟であるように感じた。

2. ノーベル賞受賞者とのディスカッション、インフォーマルな交流(食事、休憩時間やエクスカッション等での交流)の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。[全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。]

受賞者が会話の中で何気なく口にした言葉が印象に残り、研究へのヒントとなった。受賞者と非公式の会話をする機会は、休憩時間や夕食時など数多く設けられていた。最初は話しかけるのに緊張を要していたものの、数日も経つとどのような話題でも大抵の場合、気さくに回答していただいた。会議に参加していること自体が若手研究者の力になりたいという気持ちの表れなので、気になっていた専門的なこと、自分の研究やキャリアのこと、経済学一般的なことなど、どのようなことでも話しかけてみると良いと思った。

スティーブン・チューとは Open Exchange という少人数学生との対話の場(自由席)で話をした。本会議は経済学賞をテーマとしているが、同氏は物理学賞を受賞され、同賞を受賞したブライアン・シュミットも同席をしていた。自然と会話は科学一般的な大きな話となった。印象的だったのは2点ある。1点目は、研究者の心構えである。若手研究者はAとBの因果関係を証明したが、良い研究とは既存の理解の誤りを証明することにあると述べられた。粗削りな社会や自然に対する理解を誤りの証明を通じて削り落としていき、精緻なものに形成していくことが科学であるというメッセージを頂いた。2点目は、一般社会へのコミュニケーションである。目下、科学への不信感が高まる中で、研究成果や科学的知見を社会に伝えるためにはどうすれば良いかという質問があった。それに対し、チューは、社会的に影響のある人・団体にまずは科学的成果を信じてもらう努力をすること、そうするとそれを媒介として、科学が人々に受け入れられやすいと述べた。一般的にこのような質問に対しては、一般向けの新書を出版したり、一般向けの公開講座を行ったりといった回答が常であるが、米オバマ政権下で閣僚を務め、現在の米国社会・政治を知り尽くすチューの提言は非常に示唆深く、今後の自身の社会的貢献活動の参考にしたい。

また、ジョセフ・スティグリッツとは、1時間程度の散歩(Science Walk、予約制)を行った。私の研究対象でもある保険の市場均衡分析で名声を博したスティグリッツとは、そうした保険研究の話をしたかったのであるが、あまりに具体的な話に立ち入ることは他の9名の参加者に対して失礼かと思い断念した。スティグリッツは近年、左派的な主張を政界で繰り広げ、多くの一般書を執筆している。そうした傾向はノーベル賞受賞後に自身の影響力を利用して表れたものかと考えていたが、スティグリッツは大学院生時代からの理論研究を振り返りながら、政治的インプリケーションを含む主張が常に一貫して構築され続けてきたことを説明した。大成した研究者によくみられることであるが、信念と研究が一体となり、いかなる作品や発言を切り取っても、その全てが自身の主張の一部分となっている。スティグリッツも同様に、ジョーン・ロビンソンとの出会いや、ミルトン・フリードマンとの対立など、キャリアの逸話的な説明が多くされるなかで、今日のスティグリッツの主張がいかに理論研究とキャリア選択に裏打ちされたものであるかを知るに至った。

ラース・ピーター・ハンセンとは夕食(自由席)にて出会った。ハンセンは計量経済学において一般化モーメント法と資産評価方法の開発をしたことでノーベル賞を受賞しており、私の専門とはかなり遠い存在である。それでも、全く違う分野の受賞者や研究者と話をすることは有意義であると考え(ハンセンもどこかでそう言っていた)、ハンセンの正面に位置する席を選択した。ハンセンは近年関心を抱いてきた気候変動について話し、将来予測に関する不確実性が高いとはいえ、何も対策を行わないことは事態を悪化させるだけだと述べた。私は近年、気候変動対策と紐づけられた金融が行われていることを指摘し、それに対してハンセンは金融から変えることは1つの解であるが、気候変動の長期性と金融の短期性がリスクの掛け合わせにおいて課題であると応じ、私のグリーンファイナンスに対する理解が深まった。また、経済学が全般的に計量的な因果関係の証明に近年傾きすぎているという所感を伝えたところ、意外にもすぐさま同意をしていただいた。ハンセンは(自然科学ではない)社会科学の経済学において計量的に検査できるモデルに対する過剰な信頼が生じていると説明した。科学という言葉の持つ権威に引き寄せられ、社会現象を機能分解し、それぞれの因果関係をモデル化して計量的な分析をすれば、社会の隅々までよくわかるというのは慢心であると述べ、その限界を認識することが重要であり、また、計量からの「揺り戻し」が経済学で起こるであろうと強調した。計量経済学のフロントランナーがそのような発言をすることは意外であったので強く印象に残った。学問と社会に対する真摯な姿勢を感じた。

3. 諸外国の参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

歴史系分野・アプローチを採る学生が皆無に近かったことは、予見をしてはいたものの、多少の驚きがあった。最も顕著にその傾向が表れたのは若手研究者の発表であった。Next Gen Science Sessions(6分間の発表×8人程度×8セッション)は分野ごとにセッション分けがされていた。内訳は応用ミクロが4セッション、その他、マクロと政治経済学、金融、計量経済学、経済理論が1セッションずつという構成であった。経済理論セッションを除き、応用ミクロセッションを代表例として、ほぼ全ての分野が計量経済学の手法を用いた実証研究で占められ、多くが政策提言を志向していた。歴史系の発表も同様に時系列データを用いた因果関係の計量的分析であった。このように、計量分析が支配的であったという観察は、経済学の現在地を俯瞰的に理解することに有用であっただけでなく、自らの専門である歴史的アプローチの有用性も逆説的に知ることとなった。他の参加者との交流の中で、自らの研究テーマ・手法を紹介すると、あまりの違いに驚き、大抵の場合、質問攻めにあった。「どのようにモデルをたてるのか、どのようにデータを集めるのか」といった具合である。そうした時は、そもそものリサーチクエスションと得られる答えの種類に違いがあることを説明した。そうすると、「そのような問いを経済学でたてられるとは知らなかった」というふうに、経済学で所定の思考様式が当たり前のように前提視されているに気づいた人が多かった。「科学」的な手法をますます取り込む経済学のなかで、

経済史・経営史分野では存在意義を問う議論が進められている。しかし、そこまで悲観的に捉える必要はなく、他分野との違いを鮮明に打ち出すことで、経済学の全体的な分野構成のなかで重要な位置を占められるであろうと考えた。

4. 日本からの参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

「規範性を経済モデルにいかに取り込むか」という課題について議論した。理論研究と実証研究という異なる立場から、それぞれの方法で因果関係をどのように示せるか、具体的な事例を交えて意見を交わした。その過程で、現代経済学が直面している大きな課題の一つが、規範性のモデル化にあるとの認識に至った。

新古典派経済学では、個人のインセンティブは効用として表され、利己的な経済人像が共有されている。しかし、これには多くの批判がある。効用関数では捉えきれない正義感や利他主義をどのようにモデル化すべきかについては、いまだ定まった方法はない。たとえばゲーム理論における最後通牒ゲームでは公平感の存在が確認されているが、そのモデル化は結局のところ「他者への分配を自己の効用に仮想的に組み込む」という形に還元されがちであろう。こうした理解は、自己実現を最上位に置くマズロー的、かつ米国的な人間観に規定されており、普遍的なモデルとは言い難い。経済学は、利己的経済人像を強調しすぎた結果、米国社会を代表例として他者に不寛容な経済観を広めてしまった点について、自省を要するだろう。

こうした問題をどう修正すべきかについて結論は出ていないが、私たちは次の点を確認した。すなわち、経済モデルは実証的な人間社会の研究に根ざすべきであるという考えである。これは古典的経済学への回帰を意味し、たとえばアダム・スミス『道徳感情論』のように、人間がいかに他者に感情を抱き、それが行動を規定するかを理解する努力につながる。

さらに、欧米に比べて経済学教育が細分化されていない日本では、経済学史・経済史・理論研究などを横断的に学ぶ環境が整っている。その特性を生かすことで、規範性を取り込んだ経済モデルの可能性を追究できると考える。今回の議論を契機に、日本からの参加者を中心に、継続的にこの課題を探求していきたい。

5. 特に良かったと思うリンダウ会議のプログラム(イベント)を3つ挙げ、その理由も記載してください。

第一に夕食である。ノーベル賞受賞者が各テーブルに 1 人ずつ配置される夕食は自由席となっており、話したい受賞者のテーブルに着座することができる。他の交流機会と比べて夕食が素晴らしいのは、少人数で長時間にわたって受賞者を囲むことができるからである。一問一答とは異なり、長時間、個人的な会話を楽しむことができる。私はオリバー・ハートと自分のキャリアについて話し合い、貴重なアドバイスを得ることができた。

第二に Open Exchange である。メディアが入らず、録音も禁止されている Open Exchange では、ノーベル賞受賞者に静かな空間でいかなる質問もぶつけることができる。そしてノーベル賞受賞者も公式の場では話さないような本音を教えてくれる。私はスティーブン・チューの Open Exchange に参加し、オバマ政権下での様々な経験を拝聴した。

第三にエクスカッション(ボート・トリップ)である。最終日に用意されているマイナウ島へのボート・トリップはボーデン湖を横断する 2 時間半の旅である。この「余白」のなかで、他の参加者とじっくり議論することができた。通常の短い休憩時間などでは会話が途切れると気まづくなりがちであるが、風光明媚な湖を背景として時間を持て余しながら気軽に語り合い、短期的な思考では到達できない深いレベルのアイデアを共有することができた。

6. その他に、リンダウ会議への参加を通して得られた研究活動におけるメリット〔具体的な研究交流の展望がもてた場合にはその予定等を記載してください。〕

研究の方法論において理解が深まった。私は研究対象となる主体の主観的視座を採る歴史的アプローチを研究において用いている。本会議では同様の手法を用いた研究者はいなかったものの、他のアプローチを知り、それぞれの課題を認識し、相対化することで、自らのアプローチの有効性と限界を知ることができた。上述のように、経済学では計量的な実証研究が支配的な手法として用いられてきたが、近年のノーベル賞から顕著であるように、歴史的アプローチの有効性も認識され始めている。それは、計量経済学の手法の歴史研究への取り込みによるものだけでなく、2024 年のノーベル賞のように制度論的展開によるものも背景として存在し、定性的な研究も再評価がなされている。このように、歴史的な研究に対する期待を本会議でも感じ取った。大きな学問体系である経済学のなかで、どのような手法が流行り、課題を抱えているのかを知ることで、自らの研究の有用性の伝え方や他分野との分業の捉え方を考察できたのは有意義であった。

7. リンダウ会議への参加を通して得られた上記の成果を今後どのように日本国内に還元できると思うか。

直接的には、私が担当する授業に成果を反映したい。具体的には、気候変動問題を扱う際に、従来のようにその深刻さや対策事例を提示するだけでなく、経済学的な枠組みから理解を深められるようにしたい。すなわち、外部性やピグー税といった基礎概念を出発点としつつ、不確実性、産業政策、さらにはイノベーション・マネジメントにまで議論を広げるシラバスを設計することである。これにより、社会の重要課題に対して理論的な洞察を持ちながら実践的に応用できる人材を、日本で育成することを目指したい。

間接的には、研究活動を通じて成果を反映したい。経済学のトピックや手法の動向を俯瞰的に捉える努力を怠らず、自らの専門領域の有効性と限界を認識しながら、日本の経済学において独自性を持つ研究を展開していきたい。長期的には、日本における経済学全体の基調を形づくるような方法論の開発に取り組むことを展望している。

8. 今後、リンダウ会議に参加を希望する者へのアドバイスやメッセージ

第一に、自分の研究や専門以外の分野も、幅広く学習をしましょう。本会議では様々な研究をしている参加者やノーベル賞受賞者と会話をする機会があるので、その人たちが何を話しているかを理解できる能力、もしくは理解しようとする前向きな姿勢があると、とても楽しく、また自らの研究の理解も相対的に深まります。

第二に、日本からの参加者と積極的に交流をしましょう。同じような境遇で育ち、同じような環境で活躍していく可能性の高い日本の参加者は、課題を共有し、解決策をともに考えていく盟友でもあります。海外で会える日本からの参加者という境遇はお互いの信頼関係を深めますので、ぜひ交流しましょう。

第三に、意見を持ちましょう。学術的な課題や、社会問題について議論をする場面が頻繁に本会議では起こります。その際に、自分の意見を述べられなければ、会話の輪に入っていけません。日頃から様々なことに自分の意見を持つ訓練をしましょう。そうすれば、話し相手がみつき、仲間ができ、楽しいリンダウ会議になると思います。

(以上の記載内容は、氏名と併せて日本学術振興会ウェブサイトに掲載されます。)